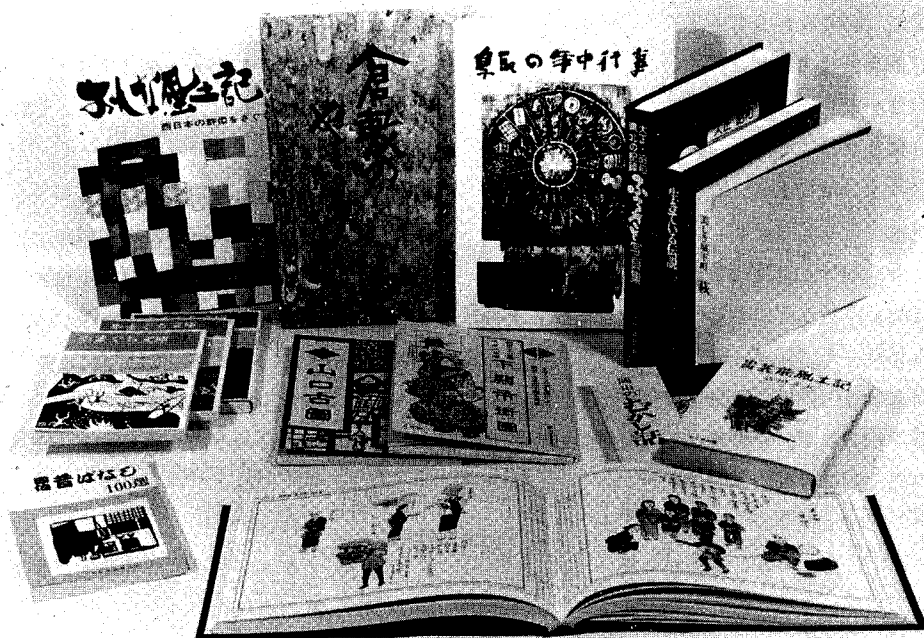


図書館たより

号数 第 37 号
 発行日 昭和52年12月15日
 編集 島根県立図書館
 発行 松江市内中原町52
 TEL (0852)22-5725
 印刷 (有)高浜印刷所



地方出版物と図書館

「真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。かつては民を愚昧ならしめるために、学芸が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあった。今や知識と美とを特権階級の独占より奪い返すことは、つねに進取的なる民衆の切実なる要求である。」

昭和2年、岩波茂雄が「読書子に寄す」と題して、岩波文庫発刊の辞を述べた、その冒頭の部分がここに引用した一文である。ちょうど50年昔のことになった。

この半世紀間で、岩波書店は、中央の有数な大出版社にのし上った。岩波に限らず、有数な出版社と称されるものは、今やすべて東京に集中して、中央集権の様相の著しきこと、出版界にすぐるものはないという現状である。

「今や知識と美とを中央の出版社の独占より奪い返すことは、つねに進取的なる民衆の切実なる要求である」とやり返したら、泉下の岩波茂雄は、単なるオチョクリと笑うだろうか。それとも、さすが彼は、にがい顔をするだろうか。冥途の便り、返信を得るすべがないのは残念だ。

「天声人語」が、読書週間にちなむ話題として、昨年も今年（10月29日付）も、「地方・小出版流通センター」のことを紹介していた。東京・神田小川町にあるこのセンターには、現在 450社が契約し、年間約15万冊、2億円の図書を出荷したという。「恐らくこのセンターがなかったら、これだけの量の地方出版物はそのままずもれてしまったはずだ」と天声人語子は指摘している。

しかし、これととも、地方の出版社で契約して加入したものだけである。個人や小グループ、同人たちの出版物で世間に知られぬものは夥しい量にちがいない。図書館がこれらを取りあげ、積極的に収集し、広く紹介することは、「民を愚昧ならしめぬ」重要な仕事の一つである。

島根県立図書館 管理課長 藤 沢 秀 晴

県下にひろがる 「古文書を読む会」(四)

安来市
美都町) の巻

安来市の巻

会の発足 昭和45年8月、安来市誌刊行によって安来市誌編集委員の間より、この機会に安来の古文書を読む会を市立図書館で計画したらの声が出た。図書館は42年8月に開館したばかりで、予算とて極めて僅少の上に職員1名、奉仕係のアルバイト2名という組織で手も足も出ない状況下であったが、折角の話、会員制でと講師物色にかかった。しかし、市内で講師交渉した方は高齢や病気で結局成立をみるに至らなかった。幸に隣接の米子市で、41年7月から鳥取県立米子図書館で毎月1回「古文書を読む会」を開設していたので、その方へ参加して学習していた。その内、安来市内の学校の先生方の希望もあり、48年11月から有志の者7人が、月2回図書館に夕方5時半から集り、2時間位講師なしの相互研究で私設の「古文書を読む会」を発足させた。しかし、これは労多く徒らに時間を費すのみで遅々として進展をみなかった。(一面よい勉強にはなったが)50年になって安来市中央公民館と相謀り僅かながら予算も計上して、漸く安来古文書を読む会を発足させた。

講師は、県立図書館へ桜木保先生の派遣方をお願いし、毎月1回、第2土曜日の午後2時より2時間、安来市民会館の会議室を会場として(図書館に部屋がないため)会費は毎回500円(テキスト代、会場費、通信費等に当てる)とする。テキストは当分講師の桜木先生に選定方をお願いして、追々に市内に埋れた古文書を発掘、テキストとすることにして第1回を51年6月12日に開いた。

会員 最初会員30名募集したところ、申込者は43名あった。極めて多彩で学校教員、市役所職員、退職公務員(最多)百姓、商人、僧侶、職人、安来書道会員、主婦等で女性は6名参加、年齢はやはり40才

以上で最高は81才であった。

歩み 第1回の参加会員は40名であった。其後会を重ねるに従い脱落者があり、又新人の参加もあったが第14回の9月には15名位となる。会場が市民会館の会議室であるため、第2土曜が第3土曜になったり第4土曜になったりするため、仕事の都合で出席不能となる会員もかなりあるという悩みが積みまとう。本年に入ってから所謂家庭学習の機会を持つことにし、テキストの終りの数ページを宿題とし、家庭で解説した結果を一括して桜木講師に送付し誤読を直してもらおう方法もとっているが、なかなか好評である。

ある会員は家にある古字書を解説し、不明の点を会員仲間にきき合せ、尚不解の文学を定例会に講師

先生に教えを請うという熱心者、又業務の都合でほとんど会に出席されないためテキストだけ求めて独習で解説し、不可解の点は当日の出席会員を訪れて教えを請うという奇特な会員も3~4名ある。

多彩な会員の構成は、昔からの地方方言や特殊用語の解明に役立つ場合が多々ある。(船大工の会員によって古文書の船

の部品名称の読みの解明等)、古文書に多く出る当字の読みが佛語の音読みによって解説(僧侶会員による)されたりする楽しさも他の会ではみられないことである。

これから 市立図書館の現状施設は極めて不備のため、古文書を収集したり預かっても保管する場所がないため手をつけていないが、今後はこの会の手によってその写しなりとも収集したく思っている。安来市は藩政時代の松江藩・広瀬藩・母里藩にまたがっているため興味深い資料もあらんかと思う。

テキスト 5人組前書、権市漂流記、捨子教誡の謡(安来徳応寺住職橘義天作)、永井屋彦右衛門笹屋柳四郎懸会始末記、布部家鳴家関連文書等々。

(文責・石場承治)

美都町の巻

「5年生になった 美都の古文書を読む会」

美都町に「古文書を読む会」が発足したのは、昭和47年7月10日午後5時30分に集った12名の初会合の日からであった。

この日の会合には「古文書ちゃあ、どんなものなのかい」という全くの初心者ばかりであった。町内には、これといった歴史的資料は少ないし特別に関心を持っていた人たちが寄って集まるというような必然性は無かったからである。

県立図書館のテキスト1冊と「古文書入門ハンドブック」を各人が手にして、ようやくまともな認識を持ったのであった。

この夜は雨足が夜更けと共に強くなって、大きな災害発生となった程で早々に散会したものである。

教育委員会が社会教育の一環として、特に中堅成人を対象に呼びかけて始めたものではあったが、この会の運営は飽くまで自主的なものとして、会長にメンバーの中から町の収入役さんでもある寺井英一氏を選んだ。平均年齢45才位であつたらうか、郵便局に勤める人、役場に勤める人、商売をする人、一般家庭の奥さん、といった方たちで会が発足した。

会則は2回目の会合の時、次の5項目を申し合せた。これが、3年も4年もよく守られたように思う。

1. 名称は「古文書を読む会」ということにしよう。
2. 会費は入会費100円、例月会費は実費負担。
3. 会合日は毎月10日と20日、日よう日は翌日（1年後から毎月10日を5日に変更した）
時間は午後5時30分から8時まで。

こうしてスタートした訳だが、地元の指導者はいないし、地方文書も少なく、ひたすら県立図書館のご好意におすがりしたのである。

前夜の会合で読めなかった文字は、メンバー中の責任者がいて図書館へ電話照会するのである。桜木先生に「何ページ、何行目の下の方上の方」といっておたずねする「あっ、そうなんですか」と合点したり一字一字を数ページに渡って教えて貰うので随分長電話することもあった。

また次のテキストは1人増えたから何部送って欲しいとか、ご迷惑なことを平気で頼んだりもした。

しかし、いつも心よくお世話を載いて遠い不便はなかった。図書館のテキストであったことは、会の運営を非常に円滑にすることができたと思う。

学習方法とはいうと、小学校の1年生の教室のように、全員が声を出して一緒に読むことを主にした。輪番に数行を読むこともしたが、これは余り望むところでないと感じた。

「講師も時どきは招こうではないか」という意見も出て、最初にお招きしたのが4回目の会合で地元出身の郷土史家である鈴政信市先生（元益高教諭）でテキストとその頃の時代背景等に指導を受けて、みんなが喜んだ。

2度目は会合14回目であったが、寒い2月の雪の積った日に松江から桜木先生を迎えた。みんな初対面の恩師にお会いした。古文書の特質事項、書式の約束ごとのようなこと等詳しいお話を聞いて、みんな大いなる勉強をした。

みんな10回20回と回を重ねるころ、ようやく古文書を読むことの楽しさも十分に理解してきた。

メンバーも14名~15名が常に出席して、何一つ苦情も出ないし、どんな相談もよく話がまとまって全員が意気投合して、いつも和やかで集まることを楽しんでい



(テキスト選び)

た。
難解な字を「こうだ」「いや違う」「こうではないだろうか」そんな中で「あっ、そうだ、間違いなし」と多数が合点する時などは騒然として、尚張切っていて明るい雰囲気ではいっばいになるのだった。

この会が2年目を迎える頃であった。今年年始会をやろうという案が出た。そこで、変体仮名のかるたがあるから「かるた会」にしようということで酒とするのを用意して正月の例会を日中にもったこともあった。

また修学旅行はどうだ、という計画が出されて1日マイクロバスを利用して、県立図書館を訪問したり風土記の丘や出雲巡りをしたこともある。

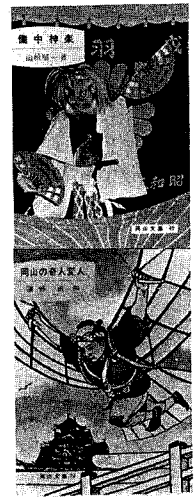
終始県立図書館を中心に、この会は成長した。教育委員会にもよく面倒をみて頂いた。一方、地方文書の発掘も進められ、唯一無二の中世の「原屋文書」の県指定を受けたり町内遺産の保存整備も進められている。今、この会も5年目の秋を迎えている。

(文責・児高房夫)

中国地区における地方出版物

ここに紹介したものについて、2つの点でおことわりをしておきたい。1は、各県の間バラツキがあることである。各県から報告してもらった結果なので報告者側の事情によっては、充分捕捉できていないと思われる。2は、スペースの関係上、小冊子などで割愛したものがある。内容を詳細に検討したわけではないので、貴重なものを逸しているかも知れない。御指摘や御意見があれば、ぜひ聞かせていただくようお願いする。なお本県については、新聞等で報道されたものが多いので、今回は掲載しなかった。

県名	書名	著編者名	出版年	出版社名
岡山県	岡山の歴史(岡山文庫57)	紫田 一	S.49年	日本文教出版
	岡山事物起源(" 58)	吉岡 三平	"	"
	高梁川(" 59)	宗田 克己	"	"
	岡山の干拓(" 60)	吉岡 三平・進 昌三	"	"
	岡山の電信電話(" 61)	萩野 秀	S.50年	"
	吉備高原(" 62)	宗田 克己	"	"
	岡山のおもちゃ(" 63)	吉永 義光	"	"
	吉井川(" 64)	宗田 克己	"	"
	岡山の港(" 65)	巖津政右衛門	"	"
	岡山の絵馬と扁額(" 66)	脇田秀太郎	"	"
	旭川(" 67)	宗田 克己	S.51年	"
	岡山の温泉(" 68)	石井 猛 他	"	"
	岡山の県政史(" 69)	蓬郷 巖	"	"
	岡山の道しるべ(" 70)	巖津政右衛門	"	"
	岡山の笑い話(" 71)	稲田 浩二	"	"
	美作の歌舞伎芝居(" 72)	二宮 朔山	"	"
	岡山の民間信仰(" 73)	三浦 秀宥	S.52年	"
	岡山の奇人変人(" 74)	蓬郷 巖	"	"
	岡山の食習俗(" 75)	鶴藤 鹿忠	"	"
	岡山の明治洋風建築(" 76)	中力 昭	"	"
	岡山地名事典	岡山地名事典刊行会	S.49年	"
	心のふるさと美作伝説考	島田秀三郎	S.49年	"
	岡山民俗事典	岡山民俗学会	S.50年	"
	失われつつあるもの(岡山カメラ風土記 1)	真田 芳夫	S.50年	"
	岡山の自然公園(" 2)	真田 芳夫	S.51年	"
	備前池田藩秘史	荒木 祐臣	S.51年	"
	岡山県の民家研究	鶴藤 鹿忠	S.51年	"
	美作国行延村矢吹家文書目録	矢吹 修	S.51年	"
	空から見た岡山(岡山カメラ風土記 3)	真田 芳夫	S.52年	"
	岡山のむかし話	岡山民話の会	S.49年	福武書店
	幕末の闇老板倉勝静	朝森 要	S.50年	"
	閑谷学校	谷口 澄夫 他	S.50年	"
	虫明街道	やすはら まん	S.52年	"



岡山県	近世封建交通史の構造的研究	藤沢 晋	S.52年	福武書店
	古代のかたち	山陽新聞社	S.49年	山陽新聞社
	吉備の書	"	S.50年	"
	やきもの備前	"	S.51年	"
	せとうち産業風土記	"	S.52年	"
	犬養毅	平沼 赳夫	S.50年	山陽図書出版
鳥取県	鳥取俳人史	萩原直正選集刊行会	S.35年	鳥取郷土文化研究会
	回顧五十年	山本天津也	S.36年	鳥取郷土文化研究会
	米子界限	野坂 寛治	S.44年	油屋書店
	因伯昔ばなし	鷲見 貞雄	S.46年	鳥取民話研究会
	因伯昔ばなし百選	鷲見 貞雄	S.50年	鳥取民話研究会
	因伯俚言(改訂版)	吉田 恵紹	S.50年	富士書店
	砂と人と風紋と	村尾 草樹	S.50年	村尾草樹
	因幡の鐺	山根 幸恵	S.50年	尚徳会
	鳥取の年中行事	高木啓太郎・鶴見憲弥	S.51年	サン文庫
	大山・花の散歩	伊田 弘実	S.51年	山陰放送
	大山の野鳥	米子野鳥保護の会	S.51年	山陰放送
	村の戦後日記	下田 一清	S.51年	月刊鳥取社
	鳥取県教育百年史余話(上)	篠村 昭二	S.51年	県政新聞社
	久松山の史跡と自然(郷土シリーズ2)	山根 幸恵 他	S.51年	鳥取市教育福祉振興会
	鳥取案内(" 3)	本城 常雄	S.51年	"
	明治大正の頃(" 4)	浅沼喜実・伊谷ます子	S.52年	"
	写真でつづる市民の暮し(" 5)		S.52年	"
	鳥取の短歌と俳句(" 6)	山本嘉将・松本稜葉子	S.52年	"
	弓浜半島と夜見村	森 納	S.52年	鳥取文化団体協議会
	木地屋の娘	今井 喜久	S.52年	ヨナ児童文庫
	大山雑考	沼田 頼輔	S.52年	新日本海新聞社
広島県	安芸門徒(広島文化叢書)	朝枝 竜雲	S.48年	広島文化出版
	中国・四国の芸能	山陽新聞社	S.48年	山陽新聞社
	広島県の植物を訪ねて	坂本 正夫	S.51年	佐々木印刷株式会社
	農業の中の淡水養魚	川上 一清	S.50年	"
	広島植物	坂本 正夫	S.51年	"
	福山散策	村上 正名	S.51年	"
	尾道散策	財間 八郎	S.52年	"
	県北の今昔	中国新聞社	S.51年	菁文社
	中国芸能風土記	吉田 文吾	S.51年	たくみ出版株式会社
	広島県の溜池と井堰	溪口 誠爾 他	S.51年	たくみ出排株式会社
	備後福山社会経済史	藤井 正夫	S.52年	児島書店
	駅名ものがたり	広島鉄道管理局	S.52年	東洋図書出版
	ひろしまの花食百話(広島探険叢書)	谷山 和美 他	S.52年	さつき出版
	中国四国おもちゃ風土記	中国新聞社	S.52年	中国新聞社
	広島あそころ	"	S.52年	"
	生きている伝説	"	S.52年	"

広島県	死装束の旅(四国八十八ヶ所)	中国新聞社	S.52年	中国新聞社
山口県	松陰吉田寅次郎伝	村岡 繁	S.47年	松陰遺墨展示館
	厚東氏史話	平中 十郎	S.47年	厚東氏史料研究会
	山口県神社誌	上山 昇	S.47年	山口県神社庁
	防府天満宮大小行司記録	市立防府図書館	S.47年	市立防府図書館
	防長人物異名攷(上・下)	下関文書館	S.47年	下関文書館
	歴史の字部	上田 芳江	S.47年	市五十年記念委
	郷 土 (18~21)	下関郷土会	S.47~50年	下関郷土会
	山口県史料(古代)	県文書館	S.48年	県文書館
	香川家文書	香川 晃	S.48年	岩国徴古館
	吉部郷土史話	吉部郷土史編集委員会	S.48年	吉部郷土史編集事務局
	周防大島歴史物語	豊田 稔一	S.48年	河村出版
	下関・外史	竹中 所孝	S.48年	亀山八幡宮
	復刻 防長造紙史研究	御園生翁甫	S.49年	マツノ書店
	復刻 防長地名淵鑑	御園生翁甫	S.49年	マツノ書店
	復刻 毛利秀元記	黒川 真道	S.49年	防長史料出版
	復刻 大内氏実録	近藤 清石	S.49年	マツノ書店
	瀬戸内海戦記	光尾 芳人	S.49年	光尾芳人
	陶村史	青木 繁	S.49年	陶村史委員会
	僧独立と吉川広嘉	桂 芳樹	S.49年	岩国徴古館
	山口県文化財要録	県文化課	S.49年	県教委
	山口県地方史関係文献目録	県地方史学会	S.49年	県地方史学会
	復刻 長府史料	長府史料編纂会	S.49年	防長史料出版社
	玖珂郡志	広瀬 喜運	S.50年	マツノ書店
	復刻 防長古城趾の研究	御園生翁甫	S.50年	マツノ書店
	萩の歴史	萩市郷土博物館同人	S.50年	萩市郷土博物館友の会
	佐藤寛作手控	県地方史学会	S.50年	佐藤栄作
	復刻 毛利家乗(1~18)	長府毛利家	S.50年	防長史料出版社
	長門国一の宮住吉神社史料(上)	住吉神社社務所	S.50年	住吉神社
	城下町長府	古川 薫	S.50年	新日本教育図書
	山口県史料・近世法制上	県文書館	S.51年	県文書館
	岩国藩の法令集2・3	桂 芳樹	S.51年	岩国徴古館
	復刻 山口県近世史研究要覧	石川 卓美	S.51年	マツノ書店
	復刻 近世防長人名辞典	吉田 祥朔	S.51年	マツノ書店
	長州藩財政史談	兼重 西島	S.51年	マツノ書店
	周防国分寺史	兼清 正徳	S.51年	防府市教委
	大村益次郎と長州	宇部市営文化バス	S.51年	条例出版
	異人のみた吉田松陰	島 幸子	S.51年	条例出版
	萩と松陰	村岡 繁	S.51年	新日本教育図書
	復刻 小倉戦争記(上・下)	吉村 藤舟	S.51年	防長史料出版社
	復刻 大島郡戦記	吉村 藤舟	S.51年	防長史料出版社
	復刻 芸州口戦記	吉村 藤舟	S.51年	防長史料出版社

「どの本よもうかな？」

——子どものための 1,300冊の本——

日本子どもの本研究会編

草土文化 2,400円

“子どもに良い本を、”と言うことは、すべての人が思うことである。

しかしながら、どの本が良く、どの本が良くない、などと言うことは簡単に判断できるものではない。

“子どもたちを強く、美しくゆたかに成長させるための心のかてとなる本を、”と日本子どもの本研究会が、子どもの本について選定を行い、その結果を機関誌月刊“子どもの本棚”に発表しているが、その中から、さらに厳選し、現在入手できる本（S52年5月末現在）を紹介している。

編集は、1冊ずつ表紙写真と解説(200字)をつけ、グレード別、ジャンル別にわけて記載し、誰にもわかりやすい子どもの本選択の手引書としている。

「烙印の女たち」

澤地久枝著

講談社

880円

ほんのちょっとした男女間のいきさつから愛人に貢ぎ犯罪を犯した女たち。犯罪者の子という理由だけで一方的に押しつけられた烙印に対し、屈辱を^{イカリ}悲りにふるえながら沈黙し耐えて一生を過す女たち。

本書はここ数年マスコミを賑わした事件の犯人や被害者となった女性達の心におけ入って、その背に負わされた烙印を見きわめ、押された側の秘めた思いを探ろうとしたものである。著者は婦人雑誌の編集部配属の下で、犯罪者と共に、逃避行をした愛人の手記取材の際、渾身の努力でぶつかり、開かぬはずの扉も人間同志の誠意や情熱を鍵として開き得ると知ったことから、今日、異色のルポライターとして活躍している。

被害者の法廷での様子、日記、メモに至るまで、克明な資料の丹念なつき合せにより事件に迫っていく。そこには、今まで知られなかった思わぬ人生をみることができるし、又、私達が安易に犯罪者としての烙印を押すことのこわさをしみじみと感じさせるであろう。

「ルイス・キャロルの生涯」

ハドスン著・高山宏訳 東京図書 1,300円

ルイス・キャロルという名前を知らなくても、“不思議の国のアリス”というお話を知らない人は、いないだろう。それは、大人を、過ぎ去った幼い日のファンタジーの世界に連れていってくれる。

そして、ルイス・キャロルという名前を知っていても、ルイス・キャロルが、数学者で、論理学者であることを知っている人は、少ないだろう。彼は、オックス・フォード大学で、数学の学士号を取った学者である。

この“不思議の国のアリス”という、とんでもない非現実の世界を描きながら、世界中の読者を魅了する不思議な本を書いた人。

それは、どんな広がりを持つ人生を送った人なのか？

その興味ある秘密を解き明かしてくれるのが、この本である。

新刊 図書 紹介

「野性の証明」

森村誠一著

角川書店

980円

岩手県の寒村で、村人が突如大量虐殺された辺地の村のため発見がおくれ、犯人のメドはたななかった。それから二年後、少女を連れた生命保険の外務員と称する若い他所者の男が、東

北の片田舎の町に住みついた。彼は、地方新聞の若い婦人記者に接近し、彼女も又この男に疑惑を持ちつつも、彼との間は進行していく。実は、彼女はこの事件でまきぞえになって殺された女性ハイカーの妹であり、彼女も又、殺されてしまう次々とおこるサスペンス！この作品は「人間の証明」、「青春の証明」とつづく証明シリーズの一つである。人間の野性

とは何か？ 文明という美名のもとに、本来野性的な動物である人間が、理性の衣につつまれ、歪められ、封じこめられてしまった。この封じこめられた野性を爆発させて、野性を証明しようとするのは人間ではないということを証明しようとするものか？ ここでは、文明社会の中で失われていく人間の心に潜む野性をテーマに、さまざまな人間模様を描く。



読書会紹介 No. 2

読書会名 津田公民館読書会
所在地 松江市東津田町1169-2 津田公民館
住所 松江市西津田町1446
代表者 氏名 宮田 朝海
会員数 15名
定例日・時 毎月第3土曜日 13:30~16:00

この読書会も10年の歳月を数えた。現在15名の会員が固定しており、30代から50代までの女性で占められている。ご主人の転勤とか、本人の就職などの関係で、若干の出はいはあるものの、このあたりの人数がコンスタントのようである。

テキストは係当番が、読書会用図書目録をたよりに県立図書館からお借りしたり、実際に書棚をのぞいて適当なものを選んだりしている。内容は文学的なものと、そうでないものとをできるだけ交互に組み合わせ、少しこみ入ったものとか、難解なものとかは避ける傾向が強い。毎月第3土曜日の午後を定例日に当て、自由な話し合いの場としている。会費は月200円。積み立てておいて遠出の足代とか、忘年会などの助成に当てたりもする。

年に1、2回は文学散歩と称して、定例会場の公民館から外に出かけることにしている。たとえば秋鹿の奥原秀夫氏宅を訪れて、保存されている貴重な文献類を一日がかりで見せていただいたり、松江を訪れた文人の跡や文化財を巡り歩いたりもした。また広瀬に歩を伸ばして月山に尼子哀史を偲んだり、出雲民芸館や平田の鰐淵寺で一日を過したこともあった。本を読むことばかりが読書ではあるまいということで、県民会館の名画シアターにも時折り参加して、映像文学に接したりもしている。まだ耳からの読書には手をつけていない。

当番は読書会のあと、持ち廻りで大学ノートに感想を記すことにしている。これは書くことの読書にもなろうというもの。終りにこ一年、取り上げたテキストを記してみる。

セーヌ左岸で(犬養道子) ネパールの碧い空(岩村昇) 銀嶺の人(上・下)(新田次郎) 俳句のたのしさ(鷹羽狩行) 微笑(近藤啓太郎) ラインの河辺(犬養道子) 開き過ぎた扉(石川達三) 涙をたらした神(吉野せい) 万葉のいぶき(犬養孝) 他の読書会との交歓がほしいものである。

(文責・宮田朝海)

読書会名 石見町母子会読書会
所在地 邑智郡石見町 石見町中央公民館
住所 邑智郡石見町矢上
代表者 氏名 毛利 寛子
会員数 15名
開催日 年間6~8回

会の名称は母子会読書会といい、発足して今年で5年になります。この会はもともと読書会として発足したのではなく町内の寡婦のものどおし。共に悩みや共通の問題を考え、互いのきづなをつよめていこうということで作られた石見町矢上の未亡人が母体になっています。

ただ集まって話をするだけではなく読書を通じていろいろな問題を考え、学習していこうということで読書会を企画することになったものです。会員の年齢が比較的高く、読書に日常的に親しむことのないお母さんやおばあさんが多いため、テキストの選定にはなにかと苦勞があります。

いままでのテキストは、「神近市子自伝」「ネパールの碧い空」「華岡青洲の妻」「恍惚の人」その他であり会員の希望により県立図書館の読書会用図書の中から貸出しをうけてこれを輪読しています。テキストの内容、あるいは文章の難易にもよりますが会員だけで討論、話し合いの読書会をすることは少なく、テーマごとにテキストごとに適当な指導者をお願いして本の解説や考え方を指導していただき会員の意見や感想を聞くということが主になっております。できるだけ月1回の例会をもつようにしていますが会員の年齢の関係からか、読書のペースが遅く毎月1回の例会というわけにはいきません。しかし、会員の方々は各様に読書会の意義をうけとめておられ、又この会をたのしみにしておられ熱心にこの会がつけられているということはのしいことであります。

(文責・松川 都)



津田公民館読書会